

『ポエム散策』

取材日/H29 7 12

所在地/山陽小野田市
新沖1-7516-23

新沖緑地公園編

橋高栄一

俳句という詩の力① 市の歴史と繋ぐ

前日の雨と打って変わった抜けるような青空。庭園を一周する。遊歩道は時折、木洩れ陽の緑のトンネルを抜ける。みずみずしい緑が実に美しい。

【二つの歌碑と建立の趣旨】庭園の方向に歩みを進める時、遊歩道に向かって、(左)森田峠の句碑 (正面)西村草生の句碑 (右)由来記の石板が目にと留まる。



石板の記事を以下に採録
しご案内と致します。



<句の解釈・所感>

(1) 森田峠の句「石炭の露頭芒を生ひしめず」—子供の頃は七夕や中秋の名月など親しむことの多い植物だった芒。一説に【スス(スクスクと真っすぐに育つ+キ(茎)

石炭の露頭
芒を生ひしめず
峠

森田峠は大正十三年大阪に生まれる
高浜虚子・阿波野青畝に師事、俳誌
かつらぎ」主宰、俳人協会副会長
宝塚に住む。この句は昭和五十四年
江戸公園における属目吟。当地の
石炭産出の名残をとどめる句

建立年月日 平成元年九月
建立者 小野田かつらぎ句会

という。古来、高い繁殖力と生命力で、長寿を表す秋の七草でもある。炭鉱が閉じて久しい。戦中は国家の生命線、戦後は膨大なエネルギー消費社会の幕開けを支えた。この句が詠まれた時、すでにこの地の石炭産業は終焉を迎え「兵どもの夢の跡」と化していた。「石炭層の痕跡」が失われるのを護るかの如く、露頭は芒の侵出に対峙している。

強いインパクトを受け、回顧に傾斜することなく、彼の心はこの一点に焦点を結んだ。客観を貫いた確固たる描写となった。「芒を生いしめず」—まるで〈掟を布告〉するような、朗々たる威厳ではないか。そこに彼の密やかな畏怖の念と一つの時代への挽歌を感じ取るのである。



豊の田の
下に坑道
ありと言う
西村草生
西村草生は昭和三年
小野田に生まれる。
阿波野青畝・森田峠に師
事。俳人協会山口県副支
部長・全国かつらぎ同人
会理事・中四国かつらぎ
同人会会長歴任
句は昭和六十年高千帆区
における吟行句。

〈句の解釈・所感〉(2) (豊かに稔った田んぼの下に 炭鉱の坑道が 今もあるってさ。)
「へえー、見たいよ、僕。私も！」—子供たちなら、こんな楽しい反応が返って来そうだ。

「昭和60年吟行」とある。広々と田圃がひろがる江汐公園方向にかけて炭鉱の有無を調べる。公園の案内板に「石炭採掘による地下鉱物の流入により、水は青く澄み、神秘的な湖水に変わり魚類は姿を消した。炭鉱閉山(昭和38年)後は水質も変わり、現在では鯉や鮒などが生息するようになった。」とあるが、本山地区と今の若山ゴルフクラブ以外は地図上に炭鉱跡はない。この「昭和38年」は、小野田の本山炭鉱が22年間の稼働を止め閉鎖した年でもある。高千帆地区は住宅街となり、田圃風景は高速道の北が美しい。やはり江汐近くで詠んだ可能性が高い。1987年、縁あって私は当地に赴任した。ある日、大学に近い《焼野海岸》で岩場に貼りついた海藻を採取する70近い女性が、「昔この辺は地べたに石炭が転がっちゃってね。毎日拾うて帰ってご飯を炊いちよった。」と話しに来てきた。徒歩数分の岬寄りの公園に《旧斜坑坑口》がある。沖合まで3kmの坑道が続いていたと云う。総延長19km、最深部で約200mの《海底炭田》があったのだ。

立ち話から30年の歳月が流れて、この句に出会うことになった。《豊の田の下に坑道ありという》—地上では豊かに広がる稔の秋、その下に炭鉱の坑道が眠っているという。奥行と広がり響き/O/、[TO/YO/NO/TA/NO]「黄金の波の」と続くかに見える流麗な《枕詞効果》、再び/KŌ/DŌ/—豊かで古代的な土のイメージが、[炭鉱の繁栄と悲劇性]の全てを包んで時を超えて行く。市の歴史に想いを馳せる人々をさらに後代へと繋いで行くに違いない。(きつたか えいいち/日本英語表現学会評議員)